［巻頭の言葉］

非凡な人になる

鍵山秀三郎　イエローハット相談役

至誠を尽くせば必ず明かりが見えてくる

一所懸命、一心不乱――創業時の私は、ただただ夢中でした。人が十時間働けば、私は十四時間、十六時間働きました。二十四時間寝ずに働くこともよくありました。

当時は会社の車に乗り、しばしば遠方まで仕事に出向いていましたが、旅館に泊まる時間もお金もなく、いつも夜を徹して走り続けるか、車中で夜を明かしていました。いまのようにエアコンのない時代です。夏は窓を閉めて寝ると蒸し風呂のように暑く、開ければ体中蚊に刺されたものです。冬は骨が凍るくらいまで冷え込み、目が覚めて体を起こすとポキンと折れるのではないかと思うくらいでした。

そうした中で、先方が何を望まれているのかを必死で探り、それに懸命にお応えして信頼を積み重ねてまいりました。自分の体力、心を尽くせるだけ尽くして、なんとか毎日を乗り越えていた私には、もっと上手くやってやろうとか、もっと楽な方法はないか、などと考える余地はまったくありませんでした。

よく〝あの手、この手〟といいますが、人間には二本しか手はありません。与えられた条件を生かしてやっていくしかないのです。そうして至誠を尽くしていけば、必ず見えなかったものが見えてきます。どっちが東か西かも分からないような真っ暗闇の中でも、いつか薄明かりが見えてくるものなのです。これは私の体験から確信を持って言えます。

もし何も見えてこないとしたら、まだまだ誠意の尽くし方が足りないと考えるべきです。自分はこんなにやっているのに、などと思っているうちはまだ駄目なのです。

この厳しい競争の時代に、そんな精神主義は通らないと考える人も多いことでしょう。しかし、昔から競争のない時代はありません。実際に私自身も、大変な競争の中を歩んでまいりました。他社が目にも留めないわずかな隙間に目を向け、それが少しでも広がるように努力を重ね、道をひらいてきたのです。

惰性を断ち切るには

人生も仕事も、一所懸命やっているつもりでも、いつの間にか惰性に陥ってしまいがちです。

人生においては一日たりとも同じ日はありません。にもかかわらず、自分の生き方や仕事ぶりが三年前と少しも代わり映えしないようであれば、既に惰性の世界に入っている証拠です。

皆さんには、ぜひともこの惰性を断ち切り、非凡な人になっていただきたいと思います。

惰性を断ち切る一番の方法は、変化を求め続けることです。

それが最もよく分かるのが掃除です。掃除をすると、それまで汚れていたところがきれいになり、すぐに変化が確認できます。変化が確認できると、次に為すべきことが見えてくるのです。

「変化を求め、次々と新しい目標を見出して、その目標に向かって誠実に努力を続けていくと、ある時、他の人が及びもつかない領域に自分が入っていることに気づくことになります。そこはもう既に非凡な世界なのです。

このように、誰もが非凡な世界に入ることはできるのです。

自分の人生が素晴らしいものかどうかは、終えてみなければ分かりません。しかし、一日一日素晴らしい生き方を積み重ねていくことはできます。誰もが簡単に歩めるような安易な道ではなく、人がなかなか歩まないような道を選んでいただきたいと思います。たとえ辛く、厳しくとも、あえてそういう非凡な道を歩んでいく中で、自分が生きる意味を見出していただきたいと願っています。」

「巻頭の言葉」はウシオ電機会長・牛尾治朗氏、イエローハット相談役・鍵山秀三郎氏、アサヒビール名誉顧問・中條高徳氏にルーテでご執筆いただきます。